

# 日本英語教育史学会 会報

## 318

2023 年 12 月 26 日

**HiSELT** *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
 e-mail: [membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp)

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト <a href="http://www.hiset.jp">www.hiset.jp</a>
---

## 第295回研究例会報告

2023 (令和 5) 年 11 月 18 日 (土), 第 295 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 27 名でした。

例会では 2 つの研究発表が行われました。最初の研究発表では, 平井清子氏 (北里大学) が「台湾英語教科書に現れる構造言語学—日本との繋がりとその分かれ道」というタイトルでお話しされました。続いて吉村和也氏 (和洋女子大学大学院 [院生]) による「中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方—1968 年~2021 年に発行された教科書の登場人物に焦点を当てて—」の研究発表が行われました。司会は孫工季也氏 (京都大学大学院 [院生]) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は平井氏, ②は吉村氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

### <発表 1 の感想>

◆対象とした範囲が非常に広く, また具体的な内容にも踏み込んでいて聞き応えのある発表内容でした。構造主義から生成文法, 生成文法からコミュニカティブ・アプローチへの流れを台湾と日本で比較することで見えてくるものが大変気になりました。今後の研究成果を楽しみにしております。ありがとうございました。(Koyamamoto)

◆台湾での英語教育については今まで自分には入ってこない情報でしたので, 英語教育史を知るにあたり大変勉強になりました。台湾での英語教育への熱 (あればですが) 知りたく思います。ありがとうございました。(山本小枝子)

◆緻密な調査と分析で台湾の英語教科書への構造言語学の影響度を明らかにされ, 学ぶことのとても多い内容でした。今後は教科書のみならず, 台湾の言語 (英語) 界への構造言語学およびオーラル・アプローチの普及の程度を明らかにされれば, 台湾英語教科書に現れた構造言語学の必然性が判明するかと思います。日本では大修館書店の『英語教育シリーズ』(全 21 巻; 1957~63) などが出され, 英語教授法書に関しても山家保 (やんべたもつ) の『新しい英語教育』(英語教育協議会 ELEC, 1963) などが出版されるなど, オーラル・アプローチはまさにブームでした。しかし 1968 年の Fries の死去が象徴するかのようになり, チョムスキーの生成文法の流行と彼の構造言語学批判を通じて, 構造言語学とオーラル・アプローチは急速に力を失っていきます (とはいえ, タイムラグや教員の保守性などにより英語教科書へのオーラル・アプローチの影

響はしばらく残りますが)。こうした日本の事情と対比する形で、台湾での構造言語学とオーラル・アプローチの浸透度合を調査され、その英語教育と英語教科書への影響度を考察されれば、さらに新たな知見が得られるように思います。台湾英語教科書史研究の第一人者としての平井先生のご研究の深まりに目が離せない思いです。(みかん舟)

◆台湾の英語教科書の変遷が、日本の教科書との比較を通して示されており、興味深く拝聴しました。個人的には文学教材の取り扱いについて関心があるため、今回の発表内容の後に予定されている調査研究、また、それを含むより大きな枠組みでの成果に期待しています。(三枝和彦)

◆教科書における語彙や練習問題などの部分は日本からの影響がみられないという点が興味深かったです。「台湾独自で」とまとめられておりましたが、それは当時の台湾で流行していた海外からの教授法や学習法が下敷きとなっていたり、編纂者の教授・学習歴が反映されていたり、さまざまな側面が複雑に絡んでいるのか、と思うと、色々と想像が膨らみ面白く感じました。(ポレポレ)

◆台湾の英語教科書を中心とした分析でしたが、これに止まらず、やはり日本の英語教科書・教師用指導書の分析と対比・対照することによって変更後の副題の表す目標が達成されるのではないかと考えました。かつ、教科書にとどまらず、教授法書や英語教育雑誌—今も続刊されているかどうか不明ですが、1976年に『英語教學』という専門誌が創刊されています—なども含めて分析対象とし、台湾英語教育界への構造言語学の導入・展開がどのようだったのか、さらに、これとわが国の英語教育界における構造言語学導入・展開との間に異同がみられるのかどうかといったような点を明らかにいただければと期待しております。(Dragon)

#### <発表2の感想>

◆ジェンダーのようにグラデーションのある観点で分析、考察するのは決して容易なことではないと思いますが、現代性のあるテーマですので、今後も是非、研究を進展させ、後世につながるような成果をあげられることを願っております。貴重な発表をありがとうございました。

(Koyamamoto)

◆丁寧な御発表ありがとうございました。そろそろ男／女だけでは分けられないような、ジェンダーフリーの登場人物も出てくるかと思えます。教科書を見る視点に示唆をいただきました。ありがとうございました。(山本小枝子)

◆ジェンダーの平等を英語教育の場でもぜひ実現したいという強い問題意識に裏打ちされた、たいへん重要なご研究だと思います。この分野では参考文献で触れておられた石川有香編著『ジェンダーと英語教育』(2020)があり、中でも森住衛「日本の中高の英語教科書に見られるジェンダー問題を考える」が100冊を超える教科書の分析を通じて深い考察をされています。それらの先行研究を精査され、その上で独自の知見をどう打ち立てるかを前面に出されると主張がより鮮明になり、社会的にも意義あるご研究になると思います。日本のジェンダーギャップが世界146か国中116位(2022年)という悲惨な状況を打ち破るべく、若い院生がこうした分野の研究に取り組んでおられることに希望を感じました。引き続き研究に邁進してください。心から応援いたします。(みかん舟)

◆学校教育の現場でも、多様性の尊重と平等の担保がますます求められる現代において、大変意義深い研究内容だと思います。質疑応答を含めて、このような観点から教科書を分析する際に考慮すべき様々な事項を知ることができて、大変勉強になりました。それを踏まえると、なか

なか大変な調査分析なので、目標の分析対象期間全体を視野に入れつつも、まずはもう少し短い期間について丁寧に研究する方がいいのではないかと思います。また、男女が登場する数値の比較がなされるわけですが、全く同じ数値になることは現実的ではないので、どの程度の差異を平等ではないと捉えるのか難しい問題だと思います。30%台と50%台は差があると感じられますが、40%同士では、差があるとは感じられないのではないかと思います。(三枝和彦)

◆ジェンダーバイアスの問題は議論が尽きないということを改めて実感したと共に、そのような貴重な場を、発表を通して提供して下さったことに感謝いたします。教科書編纂者にとって、この種の苦労は並大抵のものではないでしょうし、「どこまでをジェンダーバイアスと判断すべきか」、ある程度明確な境界線などがあれば、ぜひ伺いたいと思いました。(ポレポレ)

◆1965年版教科書というと昭和40年に中学入学の小生にとっては英語を学び始めたときに使ったものということになりますが—ただし、小生が使ったのはNew Princeでした—この時代にジェンダーバランスなどと言う概念は明確な形ではなかったように思います。その意味で、なぜ分析対象の最初に1965年版を置かれたのかが気になりました。「男女平等」ということはよく使われましたが、現代のニュアンスとはかなり異なった捉え方がなされていたように記憶しております。そのためか、研究の目的に掲げられた3点の「～を明らかにする」との項目についてその分析結果が得られたあかつきには何を主張しようとするのか、明確な像を結びきれませんでした。仮にさまざまな職業領域において50/50という数値が得られればそれで以ってwell-balanced genderismとでも呼ぶべき状況が現出した、あるいは、それに到達したと言えるのどうか、思考回路中からambivalenceを払拭することができません。今後のご研究の進展に向けて、分析対象とされる教科書の点数を上げることとあわせ、論を展開されるうえでの各節における妥当性の検証もお忘れなく、と希望しております。(Dragon)

#### <会全体に対する感想>

- ◆いつも円滑な運営をありがとうございます。また地方にいる身としては、オンライン例会は参加しやすく本当に助かっています。(Koyamamoto)
- ◆スムーズな運営に感謝いたします。田邊会長、久保野副会長のご挨拶も含蓄のあるものでしたし、孫工先生の司会進行もお見事でした。(みかん舟)
- ◆どちらも興味深いご発表で、質疑応答の時間を含めて、大変勉強になりました。(三枝和彦)
- ◆懇親会も含めてオンライン方式がすっかり定着したように思いますが、なぜか対面形式では感じない疲れが残ります。今回の研究発表で司会を担当された孫工先生のように、質疑応答時の取りこぼしのない目配りなど、会終了後に疲れを感じられないのであろうかと思うばかりです。新しいものに向かう際の柔軟性の違いなのか、あるいは、単に老若の分かれ目の問題なのか、皆さま、いかがお感じでしょうか。(Dragon)

---

「発表を終えて」

平井清子 (北里大学)

この度「台湾英語教科書に現れる構造言語学—日本への構造言語学の伝搬との関わりのなかで」というタイトルで発表をさせていただきました。直前での副題変更と内容を一部変更しましたことにまずはお詫び申し上げます。質疑応答の際に、先生方からいただいた貴重なコメントに感謝いたします。

英千里は 1960 年代を代表する台湾英語教育の礎を築いた一人です。彼が編著した高校英語教科書である「英氏高中英語」には、当時は珍しく日本文学が取り扱われ、日本の大学書林のシリーズ (1950 年代出版) からのリーディング・パートの引用・転用の多いことなど、日本との繋がりが見られます。

本発表では、この「英氏高中英語」の語彙・文法の指導や練習問題などの言語材料に研究を進め、フリーズによる米国構造言語学の理論的基盤が台湾の英語教科書にはどう反映されているかを実証的に明らかにすることを試みることでした。そして、同時期の台湾と日本の教科書の語彙・文法指導のパートを比較検討し、日本の英語教科書に活かされている構造言語学の知見が台湾の教科書に影響を与えているかを明らかにすることでした。

結果、フリーズらからの直伝を経た日本の構造言語学と同様に、台湾の 1960 年代の英語教科書はフリーズの理論に非常に忠実な理論的基盤があることが明らかとなり、台湾では構造言語学の指導法が 1980 年代までの教科書に見られました。一方、台湾の教科書には日本の教科書からの語彙、文法説明、練習問題などの引用や影響は認められず、言語材料の指導については台湾独自で作成したことが示唆されました。

台湾の当時の教科書が属人的であるがゆえに、台湾英語教育に貢献した個人を自らが編著した教科書を用いて日本英語教育史との関わりを研究することで、別の角度での台湾英語教育史研究が可能ではないかと考えます。本研究を先生方からいただいたご助言を基に時系列的に先に進め、「繋がり」から「分かれ道」まで至る所存です。

「発表を終えて」

吉村和也 (和洋女子大学大学院 [院生])

この度は発表の機会を与您とくさき、深くお礼申し上げます。

今回の例会では、「中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方—1968 年～2021 年に発行された教科書の登場人物に焦点を当てて—」と題した発表を行いました。教科書の内容には執筆者や使用者が気づかないあるいは明示的に示されていないメッセージが存在する可能性があり、特に授業に際して、あまり取り上げられない写真・挿絵に焦点を当てる必要があると考え今回の研究を開始しました。

教科書をジェンダーの視点から通時的に分析することで、これまでの日本の男女不平等の変化を知り、現在の教科書における男女不平等がどの程度改善されてきたが明らかとすることにより、これからの日本における男女不平等の改善の一助になればと思います。

日本英語教育史学会は私が大学生の時に初めて入会させていただいた学会です。入会当初から偉大な先生方の優しくも厳しい発表や問いかけに触れ、初めての発表である今回、発表内容・研究内容に対する示唆に富むコメントをくださったみなさま方に改めて感謝申し上げます。今回の反省を糧に今後も粘り強く取り組んでいく所存です。

## )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 296 回研究例会      2024 年 1 月 20 日 (土)      オンライン開催
- ◆ 第 297 回研究例会      2024 年 3 月 16 日 (土)      オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

## 来年 5 月の全国大会は広島で ～今からどうぞご予約ください～

2024 年度の全国大会は、広島市の県立広島大学「サテライトキャンパスひろしま」で開催します。会場は、広島駅から市内電車で 20 分程度、広島空港からはリムジンバスで 60 分程度。市内の繁華街に位置しています。

この会場を拠点に、対面とオンラインの「ハイフレックス」で開催する予定ですが、ご都合のつくみなさまはぜひとも初夏の広島にお越しください。

### 日本英語教育史学会 第 40 回全国大会 (広島大会)

期日：2024 年 5 月 18 日(土)・19 日(日)

会場：県立広島大学「サテライトキャンパスひろしま」  
(広島市中区大手町 1-5-3)

今回は第 40 回の記念大会として開催します。土曜日の記念講演には前会長の江利川春雄先生(和歌山大学名誉教授)にご登壇いただくほか、会と大会の歴史を振り返るプログラムを検討中です。ご発表とご参加のお申し込みについては、次の会報および公式ウェブサイトでご案内いたします。どうぞ今からご予約ください。広島市は観光客も増え、宿の確保が難しくなっておりますので、お泊まりをご予定のみなさまは早めのご手配をお願い申し上げます。



(会場案内図は県立広島大学ウェブサイトから)



## )) 事務局より

- )) 8 月以降、これまでに開催した 2 回の理事会では、全国大会および学会誌を主な議題としました。詳細は次号でご報告します。
- )) 会費の早期納入にご協力くださりありがとうございます。事務作業が一部遅延しご迷惑をおかけいたしております。勝手ながら年末年始はお休みをいただき、新年 1 月 9 日より通常の業務に復します。

---

## 日本英語教育史学会 第 296 回 研究例会

日 時： 2024 年 1 月 20 日 (土) 14:00~17:00

オンライン開催 (申込方法については、学会ウェブサイト (<http://hiset.jp/>) 内の「オンラインによる研究例会参加方法」をご参照下さい。)

研究発表

### 日本における英語語彙教授法・学習法の再評価： 明治期刊行の資料を元に

熊谷 允岐 氏 (茨城大学)

【発表者から】本研究は、明治期の外国語教授および学習法書に焦点をあて、特に語彙教授・学習法が、日本でどのように取り上げられていたのかについて明らかにし、現代の語彙習得理論との関連性を考察することを目的とする。本発表では、日本における語彙教授および学習法がある程度体系化されたと推測される明治中期以降の研究書に注目し、当時の語彙習得理論の再評価を試みる。

研究発表

### 戦前の中学校英語教科書における CLIL の事例研究

二五 義博 氏 (山口学芸大学)

【発表者から】CLIL は 1990 年代のヨーロッパで始まったというのが定説であり、最近では、日本の中学校の検定英語教科書においても社会科や理科と関連付けた題材がいくつか取り入れられるようになってきている。しかしながら、中学校英語の教科書に CLIL が取り入れられるようになったのは現代が初めてなのであろうか。そこで本発表では、戦前・戦中期を中心とした中学校英語教科書 (中等教育研究会 (1940) *The new national English readers* など) の分析を通して、海外の事例や日本の現在のみに目が向きがちな CLIL 研究に対して、日本の過去からも学ぶべき点が多いことを示唆したい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

---

**EDITOR'S BOX** 今年の年末はコロナの心配をせずに帰省できるのでほっとしています。みなさまもどうかよいお年をお迎えください。来年が明るい年になることを心からお祈りしています。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [wakaari@nifty.com](mailto:wakaari@nifty.com))